

2. 令和6年度 学校経営方針

(1) 校訓に基づく学校運営を通して、学校教育目標の達成を目指す。

●校訓「自主」「創造」「敬愛」について

「自主」：自らすすんで行動し、物事をより良い方向へ進めようとする意識であり、自ら学び、考え、行動する力をつけること

「敬愛」：互いを尊重し、支え合い、高め合う意識であり、互いにコミュニケーションを取り合い、理解し合ったり、支え合ったりする力をつけること。お互いに切磋琢磨して高め合うことや、行き詰まった人を思いやり、励ましたりすることもある。

「創造」：質の高いものやオリジナリティのあるもの、人に感動を与えたり、多くの人のために役立ったりするものを創ること。より良いものを目指したり、高いクオリティを求めたりするには、失敗を恐れず挑戦する気持ちや失敗しても立ち上がる粘り強さ、経験や学びを生かしていく力などが必要となる。

●教育目標「共に考え、協同して課題解決に努める生徒」の育成について

「共に考え、協同して課題解決に努める生徒」とは、まさに、「自主」と「敬愛」を土台として、より良いものを「創造」しようとする生徒の姿を表している。つまり、校訓を連動させて創造性を高めることが、本校の教育目標の達成につながることになる。

また、学校教育目標の達成のためには、教師や生徒、保護者そして地域の方が、目標を共有して、同一歩調で歩いていくことが大切である。そのためにも校訓「**自主・創造・敬愛**」を常に共通の目標として活動実践を行うことが重要である。

(2) 教育目標の達成のための重点活動（教師の心得）

校訓と教育目標の具現化を図っていくために以下の2点を重視して教育活動を行う。

「個が生きる」教育を、全教科、全職員で模索し実践する。

昨年度の重点努力目標であった、1. 学びに向かう姿勢、2. 一人一人を大切にされた取組、3. 支持的風土の醸成を包括する重点活動として、「個が生きる」教育活動を重視していく。

「個が生きる」とは

教育を推進・牽引するのは、職員であり、その職員一人一人が個々の力を発揮してこそ、活発な教育現場が実現する。つまり、「個が生きる」の第一は、各職員の力をフルに発揮できる教育現場をつくることである。より良い教育環境や生徒の学びの機会、効果的な教育計画のために、全職員の知力と実践力を結集してほしい。

そして、生徒の可能性を見出し、個々の力を引き出すためには、その実態を把握し、困り感や要望、より良い指導方法などについて、トップダウンやミドルアップ、ボトムアップなど、様々な方向から意見やアイデアを出し合い、方策を模索して、実践していかなければならない。つまり「チーム西彼」としての組織力を生かした展開が図られるよう努力することが大切である。

職員が、生徒の第一の理解者となり、その力を信じ、高める働きかけを行うことで、生徒は自信を持って行動できるようになる。生徒同士が切磋琢磨したり、支え合ったりしながら、伸び伸びと活動する姿こそ「個が生きる」姿であり、その実現のために、生徒とともにある職員意識を大切にしていきたい。

「学びの土台づくり」を、全教科、全職員で模索し実践する。

本校の教育目標である、「共に考え、協同して課題解決に努める生徒」を育成するためには、「しっかりとした学習習慣に裏打ちされた学力の定着」が必要である。

●学びに向かう姿勢の定着による学力向上・・・「学びの土台づくり」のために

【基本的生活習慣の定着】

- ① 「2分前着席、1分前黙想」を生徒自身の手で習慣化させる。(ノーチャイム行動の習慣化)
- ② 聞く姿勢の習慣化による「聴き合う力」の向上に取り組む。(聞く人は、話す人に身体を向ける)

- ③ 話し手の伝達力、表現力の向上が、「聴き合う力」の向上につながる。(きちんと話せば、きちんと聴く)
- ④ 分からないことは、迷わず訊く。(解答ではなく、「どうしてそうなるのか?」を訊く)

【協同的な学びのための学習スキルの定着のために】

- ① 「対話して考える授業」の実践に取り組む。(発言や疑問は教師ではなく、生徒同士で)
- ② 教師は生徒の発言に対する正誤の判断をするのではなく、生徒同士の発言をつなぐことを大切にする。(その意見、考えについて、「あなたはと思う?どう考える?」)
- ③ 学習課題を重視した授業プランづくりに取り組む。(「共通課題」はこれでよいか。「ジャンプ課題」は生徒の学習意欲を喚起するものとなっているか。)
- ④ 単元を見通した「協同学習」を展開する。(この単元で深く考えさせたい、探求させたい場面はどこか?この時間は「ミニジャンプ」、ここは「ガチジャンプ」で)

【ともに学び、ともに高め、磨き合うために】

- ① ローテーション道徳で多くの職員が生徒一人一人と接し、思いを伝え合い、議論し合うことで、人としての生き方、考え方を共有したり、より良く生きることの大切さを実感させたりする。
- ② ローテーション道徳において、人生における学びや思考、議論の大切さを、各職員が様々な視点で示したり、協同の大切さを実感させたりすることで、「学びの共同体」づくりの実践力を高めると共に、生徒たちの共同スキルの向上を図る。(道徳で、生徒と共に楽しく、真剣に議論する。)

●支持的風土の醸成による学年・学級の雰囲気の高揚

【支持的風土を醸成する授業づくりのために】

- ① 学級の支持的風土を醸成する最たる場である授業において、確実に共同の場を設け、安心感・所属感を醸成すること。
- ② 道徳科を中心とした、対話と議論に基づく賛否のある授業づくりに努める。
- ③ 生徒と教師がともに考えるルールづくりを通して、授業における安心感とともに、主体性を持たせる。

【自発的行動による支持的風土の醸成のために】

- ② 生徒の自発的行動を促すとともに適切に評価し、認め合う場を設ける。
- ② 学級の課題に向けて、「効率と公正」の観点から話し合う環境をつくる。

【人権教育の推進による支持的風土の醸成のために】

- ① 自己理解、他者理解を深め、自分の居場所を実感するための一人一役のある環境づくりを図る。
- ② 自他の言動や価値観を振り返らせることで、人権感覚の向上を図る。

●支援を要する生徒、弱い立場にある生徒への積極的な関わり

【すべての生徒にかかる特別支援教育推進のために】

- ① 授業のユニバーサルデザイン化に取り組む。(・ねらいを焦点化する。・視覚化する。・共有する。・振りかえらせる。)
- ② 具体的な行動を指示する。生徒の疑問や戸惑いに適切に応える。

【配慮を要する生徒にかかる支援・指導のために】

- ① 支援委員会による情報の共有と具体的支援の在り方について、共通認識のもとに支援・指導にあたる。
- ② 特に配慮を要する生徒については、自他の違いを感覚的に理解させる。
- ③ 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の職員共有を図り、それぞれの生徒の目標を確認するとともに、生徒の目標達成に沿った支援に努めること。